姫島黒耀石の分布について

竹長賢治

一、はしがき

東九州先史時代の石器の中、姫島産の黒耀石の打製石鏃が多数の割合を占めていることが注目される。即東半島の突端にある姫島は西部瀬戸内海の地理的中心点にあり、しかも潮流を利用することに依り、中国・四国と思う所に行ける分岐点に位置している。この姫島に産する黒耀石の分布を追求することに依り、姫島を中心とした東九州の――西瀬戸内海――文化交流の範囲が少しでも把握出来るのではないかと思い、不完全ではあるがこゝに分布の状態を記してみたい。

二、姫島黒耀石の概説

「火山系」

姫島黒耀石は姫島で相交叉する二種の火山系、即ち瀬戸内火山系と山陰火山系の二種のうち、より古期の活動系と考えられる瀬戸内系の火山岩類の一員として次の如き産状で見出される。

「種類及産状」

姫島黒耀石として従来一括して呼ばれているものゝ中に、二種類ある様である。然し両者は岩質上に相当の相違がある。即ちその一つは観音崎の北端に見られるもので、そのすぐ東側に露出する石英粗面岩と漸移して、大きなブロックをなしている。特に、観音崎突端西側では海中より三、四〇米の高さに海蝕崖として見事な露出を見せている。此の黒耀石は産状より見て、石英粗面岩と成因、組成の上から密接な関係のあることが推定される。

他の一種は西浦西方の絶崖及び稲積の南部で集塊凝灰岩中の礫として見出されるものであり、外観上前者よりもつとその色が黒味を帯び前者より塩基性の岩石に属し、之等は達磨山・柱ケ岳辺に露出する雲母安山岩と密接な関係を有するものと考えられ、此の集塊凝灰岩は雲母安山岩の下部に累積されて居る様である。又此の種の黒耀石は海浜の砂礫中にもかなりな量が散見され、大きい礫になると各二十糎にも及ぶものがある。（以下優黒色黒耀石と称す）（「姫島村史、地質編」が昭二九年八月に刊行された。を参照されたい）

「性　質」

①石英粗面岩質黒耀石……色は淡灰黒色、流理構造をなし、貝殻状の断口をなす。質は殆んど無色の玻璃を主体とし、長石雲母磁鉄鉱の微晶に富み、僅かに紅色の柘榴石の微粒を含む。

比重＝2.383
全反射屈折率
N Na＝1.487

分析値	
SiO_2	74.98
Al_2O_3	13.63
Fe_2O_3	0.31
FeO	0.87
MgO	0.38
Na_2O	4.32
CaO	0.52
K_2O	3.66
H_2O	0.74
TiO_2	Tr
P_2O_5	0.07
MnO	0.08
Total	99.56

②優黒質黒耀石……達磨山・柱ケ岳辺という本島東西端に分布する雲母安山岩と同じ様に、此の黒耀石も雲母安山岩で雲母安山岩質黒耀石と称すべきもので、前者より岩質が堅硬で、既述せし如く黒味が強く灰黒色をなす。従つて透明度少く、流理は見られない。雲母長石角閃石の斑晶をもつが全般に玻璃質である。前者と明瞭に異る所は漆黒色の角閃石の斑晶が目立つ事と前者より玻璃光沢の少い事、質が粗面で成分的にも前者より塩基性である事などが挙げられる。

三、分布状態について

前述の様な特性をもつ姫島黒曜石がどの範囲に分布しているかを追求して見よう。

先ず周東半島の西の宇佐平野に於てそれを見ると、

宇佐郡駅館村中尾青樹氏蒐の石鏃の中、

イ、完全石鏃

姫島黒曜石	一六五個	四三%
阿蘇黒曜石	三二個	九%
瑞岩	二八個	七%
サヌカイト	一二八個	三三%
その他	三二個	九%

となつて居り、姫島黒曜石の打製石鏃に於ける需要度は全体の四三%となつている。また

ロ、不完全石鏃

姫島黒曜石	一八九個	五九%
阿蘇黒曜石	三〇個	九%
サヌカイト	八五個	二七%
瑞岩	一五個	五%

となつて居る、

同地渡辺四郎氏蒐の石鏃中、

姫島黒耀石	二四個	七七％
阿蘇黒耀石	二個	六％
その他		一六％

となつて居る。

採集地同郡駅館村小倉池よりの石鏃中、姫島黒耀石製のものが圧倒的に多く、その過半数を占めている。この外姫島黒耀石の剝片は多数に認められる。宇佐のその他の地方で、

宇佐郡上田村東上田にて姫島黒耀石　七個

仝　四日市台の原にて阿蘇黒耀石　一個

等、姫島・阿蘇黒耀石が検出されて居る。

この様に姫島産の黒耀石が多量に宇佐地方に発見されている事実によつて、宇佐地方の打製石鏃の原材を姫島に求めて居たことは確かであり、こゝに姫島との交通が存在した事を物語る資料となろう。なお姫島黒耀石の外、多量の珪石製の打製石鏃が出土して居るが、この珪岩の原産地はこの附近には見当らず、臼杵十八代線で結ぶ大分県外帯地域、即ち秩父古世層の中に存在するものである。その他には福岡県小倉附近にこの珪岩の産出地があるが、宇佐地方の場合、福岡県よりこれを求めたと解する方が至当であろう。

速見郡川崎村早水台遺跡は国東半島の着根部にあり、別府湾に面する標高三〇米の台地である。この遺跡は昭和二十五年大分大学歴史学研究会の試堀により調査が開始され、昭和二十八年七月と同十一月の二回にわたつて本格的に押型文遺跡として県文化財保護委員会の手に依つて調査された。この遺跡の石器（石斧を除く）を見ると、

	姫島	阿蘇	珪岩	その他	計
石鏃	二五個	一一個	二三個	六個	六五個

石匙	五個	九個	四個	一八個	
石ヘラ	一五個	二六個	五個	四六個	
石鏃より石器		二個		二個	
破片		三個		三個	
計	四五個	一一個	六三個	一五個	一三四個

となつて居り、全体の約（三分の一）が姫島産の黒耀石製のものである。又宇佐地方の場合と同じく珪岩製のものが四七％を占めて居り、その原産地が南北何れに求められるか押型文遺跡だけに興味ある問題であろう。

前二者の外、国東半島は勿論、別府・大分・佐賀関とその割合はとつて居ないが、県内各地に少数の阿蘇黒耀石と共に、多数の姫島黒耀石が存在して居り、その個体数は非常に多い。しかるにその西限を探るに、宇佐より安心院・玖珠・森町に多数存在し、日田郡五馬村出口に於て、阿蘇・姫島黒耀石の同数の石鏃を出土している。

姫島黒耀石	三個	八％
阿蘇黒耀石	三個	八％
その他	二九個	七四％

となつて居り、福岡県三潴郡高三潴遺跡より石鏃一個、日田市附近にも存在の可能性はあるが、一応の限界線がこの附近にみられるのではなかろうかと思われる。

又一方、西南地域では大野郡公民館蔵の大野郡山南七ノ原出土石鏃中、姫島黒耀石三個・阿蘇黒耀石一個・その他一個があり、黒耀石剝片は多数存在して居る。又出土地不明（大野町及附近のものではあろう）のものゝ中（石鏃）、

姫島黒耀石	九〇個	五五％
阿蘇黒耀石	五個	三％

珪　岩	一三個	八％
安　山　岩	四九個	二九％
そ　の　他	八個	五％

となつて居り、姫島黒耀石が圧倒的に使用されていることが解る。又直入郡荻中学校蔵柏原出土石鏃中、姫島黒耀石三個・珪岩二個・安山岩四個があり、こゝに於ては阿蘇黒耀石製のものは発見されなかつたが、直入郡竹田町北村清士氏蔵石鏃中、阿蘇一八個・姫島黒耀石一個・サヌカイト二個があり、阿蘇山による自然の障害を受けてこれより西には分布は認められ難く、黒界線をこの附近に引くのではなかろうかと思う。

次に南は遠く宮崎市大字田代北にまで分布が認められる。左に宮崎大学考古学部日本史教室蔵中の姫島黒耀石の出土地を記すと、

児湯郡富田村	一	東臼杵郡北方村	一
今郡妻町清水	一	小林市永田平公園	一
今郡川南村	二		

があり、その他姫島黒耀石の剝片が数個存在したが、出土地は不明である。又宮崎博物館には、

児湯郡都の町	一三個
西臼杵郡岩戸寺	一個
今郡真幸町	一個（阿蘇黒耀石）
東臼杵郡西郷村	二個

が蔵されて居り、昭和廿七年八月宮崎県西臼杵郡高千穂調査の際は、同高校に多量に蔵されている姫島黒耀石製石鏃と剝片をみた。

宮崎県に於ては、宮崎大淀川をもつて一応の分布の境界とするらしいが、これ以南の調査を行つていないので解らないが、これより以南大隅まで分布している可能性もあろう。南限は不明なものとしても、西限は九州山脈によつて一線を引くことが出来よう。

扨て、目を転じて北限を探ろう。福岡県八幡市外高月遺跡から姫島黒耀石の石鏃を発見しているので、豊前福岡にも今後の調査により多数の姫島黒耀石の分布が認められるかも知れない。

また、山口地方では、その数量は判明しないが、

熊毛郡佐賀村大字佐賀字浜田小字岩田
光市、光井、森ケ峠、薬神
山口市宮野
仝市宮野桜畠
吉敷郡仁保村大字中郷字鶯の巣
仝郡小野町中郷
下関市安岡町神田
玖珂郡高森町（以上フリントと記載）
山口市大字大歳字勝井
吉敷郡大内村大字長野小字長者原
仝郡仁保村大字中郷字高野小字西
大津郡大字三偶浅田（以上黒耀石と記載）

が「島田川」に報告されている。同島田川調査担当者山口大学小野忠熙氏の報告によれば、フリントとあるのはいわゆる姫島

産の黒耀石であり、黒耀石とあるのは阿蘇山系類似の黒耀石であると報告を受けた。この姫島産の黒耀石は、広く山口県下に分布して居るのに反し、阿蘇山系と思われる黒耀石は周防東部にはほとんどみられず、その数も非常に少くなつて行く。わずかに熊毛郡岩田遺跡・玖珂郡高森町遺跡の二つが知られるのみであり、その他の遺跡では出土例がみられない。これに反して西部に行く程その度を増し、下関市安岡町附近では表面採集だけで、この種の石鏃が二、三年間に数千個を検出しているという。小野先生の報告によれば、阿蘇山系の黒耀石は日本海岸の阿武郡大井から瀬戸内海斜面の佐波川を結ぶ線以東には特に少く、長門地方に多く、しかも響灘沿岸特に下関市安岡町附近に濃密であることである。縄文式遺跡には比較的阿蘇系黒耀石が多いのに反し、彌生式遺跡からは姫島黒耀石が圧倒的に多くなつているとのことである。

以上によつて、姫島黒耀石が山口県全般にわたつて分布しているということが解るが、これ以東、広島県地方は全く不明であるが、岡山県浅口郡大島村津雲貝塚より一個出土例がある。しかし北九州南九州と共にその可能性は多分に存すると思う。

四国地方では阿方遺跡に一例あるだけであるが、その西部に多量の姫島黒耀石の散布をみてもよいのではあるが、全く不明であり、今後の調査にまつより外はない。

扨て、姫島黒耀石の分布範囲は姫島を中心として、陸上では百粁米、瀬戸内海及び海岸部では、二百粁米の半径をもつ広汎なる地域である。これが一切の時間的な前後関係をぬきにした平面的なものだけに広汎なる地域を占めているのかも知れないが、一時期を割すれば、或いは東九州の土器型式と一致した分布を発見する可能性がないとも云えないだろう。

（別府市溝口中学教官）